

中国における大型商業銀行国際化の展開過程

呉 博宇（九州大学大学院経済学研究院）

報告要旨

2008年のリーマンショック以降、中国の商業銀行は積極的に海外拡張を実施し、世界の銀行市場の一角を占めるに至った。2018年時点で、中国の大型商業銀行5行は61カ国・地域で1281の営業拠点を有し、グローバルネットワークの基礎を築いたといえる。

中国商業銀行による、こうした新たな国際展開は、いかにしてもたらされてきたのか。従来中国の学界では、主に折衷理論やFollower説に沿って銀行の多国籍化が分析されてきた。1990年代後半からリーマンショック直前までの研究では、支店や駐在員事務所の新設を中心とする進出方法、海外拠点の先進国への集中、企業FDIと銀行拠点数のミスマッチなどのエビデンスにより、中国の銀行には独自の国際化要因（政府の影響など）が存在することと指摘され、折衷理論とBank Follow Industry説に否定的な見解が多数を占めた。しかし、2008年以降、多くの実証分析を通じてFollower説の適応可能性次第に明確となってきた。

そこで、本研究ではまず、中国の商業銀行の海外進出に影響する諸要因について、検証作業を行った。具体的には、2007年から2018年間の中国大型商業銀行5行の海外拠点の分布と各ホスト国の情報を整理し、パネルデータ分析を行った。その結果、中国の大型商業銀行は海外進出の際に、①中国企業のFDI（対外直接投資）をフォローしている（Follower説）のみならず、②華僑・華人が集中している国・地域を選好している（歴史と文化の所有優位性）ことが示された。リーマンショックを前後して、中国の銀行は従来の進出パターン（①自国企業のFDIを必ずしもフォローせず、②所有優位性がない地域にも進出する）からの「転換」を経験したものと考えられる。

既存の多国籍銀行論を踏まえつつ、中国の商業銀行が経験した上述の「転換」の意味を総体的に把握するために、本報告では銀行業国際化の発展段階に関するDicken（2007）に注目した。そこでDickenは、銀行業国際化の段階的発展プロセスに関する諸学説を基礎に、国際バンキングを四段階——①国内バンキング段階、②主に多国籍金融サービス業務を営む国際バンキング段階、③多国籍ホールセール業務を営む国際フルサービス段階、④多国籍リテール業務を営むグローバル・フルサービス段階——に区分し、それぞれの段階における主要な進出形態（コルレス契約、支店・駐在員事務所新設、地元金融機関の買収など）やその目的について体系的に整理した。

Dickenの説を踏まえて中国商業銀行の国際化プロセスを振り返ると、発展初期に「問題点」とされたエビデンスは、実は第1と第2段階にある銀行に典型的な特徴であったことがわかる。そして、リーマンショック以降、第3段階まで成長した中国の大型商業銀行は、自国企業のFDIをフォローし、自らの所有優位性を活かす戦略を採用している。すなわち、この間の中国の商業銀行の国際化は、必ずしも中国に固有のパターンを辿ったわけではなく、従来の多国籍銀行論に沿って段階的に展開されてきたものと考えられるのである。

以上のように既存の多国籍銀行論の中国商業銀行への適応可能性を検証することで、多国籍展開の最終段階に向け、国際リテール業務のための支店網再編・地域的統合を推進し、海外資産を拡大させている中国大型商業銀行の現下の国際化戦略の現段階の特質を、多国籍展開の最終段階に照らして分析・評価することも可能になるものと考えられる。

参考文献 Dicken, Peter (2007), *Global Shift, Mapping the Changing Contours of the World Economy, 5th Edition*, Guilford Press.